

アフィリエーション・ネットワーク・モデルを用いた大学同窓会の構造と機能についての定量分析

津曲, 達也

<https://doi.org/10.15017/2534514>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 津曲 達也

論 文 名 : アフィリエーション・ネットワーク・モデルを用いた大学同窓会の構造と機能についての定量分析

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

少子化、グローバル化などの社会環境変化は、わが国の大学に対し厳しい状況を生み出している。こうした環境変化に適応しようと大学は様々な改革に乗り出している。その改革の流れのひとつとして、大学同窓会に注目する動きが強まってきている。

独立法人化以降、全学同窓会を設置する国立大学が増加しており、また、大学は卒業生のネットワークの維持や発展させる方法を模索している。この理由としては、資金援助や在学生への学習・就職支援、地域事業への関与といった面で大学が大学同窓会への期待を高めており、これらを実現するためには濃密なネットワークが重要であると考えられている。しかしながら、大学同窓会のネットワーク構造はこれまで逸話的に語られてきた程度であり、定量的・実証的には特に明らかにされてこなかった。

本研究の目的は大学同窓会ネットワークについて、大学同窓会内のミクロな動きに着目し、大学同窓会のネットワーク構造、そしてその構造と卒業生の行動との関連について定量的に明らかにすることである。ただし、この目的を達成するためには、大学同窓会ネットワークを定量的に観察する新たな一般的方法を開発することが必要である。大学同窓会のネットワークへの言及が定性的なレベルにとどまっていた理由は、定量的にネットワークを研究する方法がなかったからである。この方法の開発が本研究のもう1つの目的となる。本稿では、前者を第2部で、後者を第1部で取り扱う。

第1部では、記録データとしての大学同窓会誌に着目し、大学同窓会ネットワークの定量的研究を実現するため、大学同窓会誌から定量的なネットワーク・データを抽出する方法を検討した。早稲田大学校友会が発行する大学同窓会誌『早稲田学報』を対象に、雑誌編成分析と継続的に掲載されていた会合記録の内容分析を行い、「同窓会名」、「会合参加者の氏名」、「会合の日時」、「会合場所」、「会合の内容」といった5つの情報が得られることが明らかとなった。そして、記録からネットワーク・データを抽出する際に問題となる「同姓同名」や異体字などが原因となる「記載のばらつき」について、会合記録内の情報を組織的に活用し、信頼度の高いアフィリエーション・ネットワーク・データを生成する方法を開発した。これによって、卒業生の大学同窓会への参加行動をネットワークとして数学的に表現することが可能になった。

第2部では、第1部で開発した方法を利用して、大学と卒業生が希薄であると指摘されていた時期である1960年代の早稲田大学同窓会を事例として、大学同窓会参加者のミクロな動きから生まれる大学同窓会ネットワークの構造を明らかにした。そして、その構造と卒業生の寄付行動の関係について、大学同窓会アフィリエーション・ネットワーク上の2つの視点、位置関係の視点、そして紐帯の強さの視点から分析を行い、以下を明らかにした。

まず、大学同窓会ネットワーク構造について明らかになったことは以下の通りである。

① 位置関係の視点

大学関係者と卒業生の位置関係は距離 2、距離 4、距離 6、パスなしの 4 通り存在する。さらには会合を開催した同窓会に着目し、同じ同窓会が開催した会合を経由する距離 4（同結合）、異なる同窓会が開催した会合を経由する距離 4（異結合）の位置関係が存在した。そして、卒業生は距離 2 の位置関係にあるものが圧倒的に多い。

② 紐帯の強さの視点

大学と卒業生の紐帯の強さは、同窓会会員として参加する大学関係者によって、Granovetter の紐帯の強さの定義で最も弱い紐帯に分類される「めったに会わない」の上限値を少し超えた紐帯の強さで卒業生との関係を維持していること、来賓として参加する大学関係者は 1 度きりのつながりであり、同一人物による関係の発展がない。

次に、卒業生の寄付行動について明らかになったことは以下の通りである。

① 位置関係の視点

距離 4（同結合）を除いたとき、距離が近いほど、寄付行動率、1 人当たりの寄付額、寄付者 1 人当たりの寄付額が高い結果となり、卒業生の行動は常識的なものである。なお、距離 4（同結合）の位置関係にある卒業生は常識的な行動とは異なる振る舞いをしている。

② 紐帯の強さの視点

大学関係者との紐帯の強さが強くなったときに、卒業生は寄付行動に至る傾向にあるケースが多い。しかしながら、強い紐帯の時に寄付行動が起こりやすいとは言えないことも示唆された。また、寄付金額については、紐帯の強さが強いときは、寄付金額は少ないレベルでかつそのばらつきは少ない一方で、弱い紐帯のときは寄付金額のばらつきが大きくなる傾向がある。

本研究は、定性的に指摘されていた密なつながりが卒業生の寄付行動を促進するという従来の認識の正しさをアフィリエーション・ネットワーク上の位置関係と紐帯の強さの視点で実証的に示すと共に、他方で、その予想が一部成立しない場合もあることを明らかにした。